

小説  
七色春日

イラスト  
cinkai

# ギヤング・オブ・エウシヤ

—街角の錬金術師と魅惑のポーション—

1

試し読み版



BEINGWELL PUBLISHING



# GANGS OF YŪSHA

## 1

### CONTENTS

外伝・運動不足の暗黒騎士	299
エヒログ・街角の錬金術師	287
第六章・されと死体を見ずにはいられず	252
第五章・第三の策略	214
第四章・錬金工場を破壊せよ	157
第三章・ギャング・パーティーを結成せよ	108
第二章・エルフ族の死体を奪取せよ	050
第一章・パーフェクトポーション	016
プロログ・エラーナイフの錬金娘	005

## プロローグ エラーナイフの錬金娘

ポーションの過剰摂取はおやめください。

回復のし過ぎはあなたの精神のバランスを崩す恐れがあります。

——錬金術師協会。

風に巻き上げられ、眼前に飛んできたピラの文面を読み終えると、シヨージ・クイックはびりびりに破いて紙片に変えた。紙吹雪となって手の平から飛び、民家の屋根を越えて消える。

ご親切にピラで忠告しなかつて、誰もがわかっていることだ。

回復系ポーションには肉体を癒す効能がある。

使用者の出血をとめ、傷口をふさぎ、苦痛から解放する神秘の魔力が宿っている。

そんな不思議な霊薬を使えば、精神に変調をきたしても何もおかしくはない。

そもそもが、錬金術師協会がポーション販売をしきっている。

副作用があるとわかつていて、売りさばくのは金になるからだ。

「……こつちだったか」

酒場に吸い込まれていく労働者たち、馬車に運ばれてキセルをふかす貴婦人、蛮声をあげて喧嘩

する傭兵崩れ——そんな連中がひしめく大通りからシヨージは背を向け、路地裏に足を向けた。

気だるげに歩きながら、腰に巻いた弾薬帯だんやくたいから試験管を抜く。

コルク栓を親指で弾き、下級回復薬であるローポーションを口にふくんだ。

霊薬が喉をするつと通過し、胃袋に浸透する。

すぐに回復効果が肉体を駆け巡った。可視化される魔力は雪の結晶に似た姿となり、シヨージの全身を覆い尽くし、パツと弾け飛ぶ。

——これだから、回復ポーションはやめられねえんだ。

自らの肉体には傷はない。ゆえに回復ポーションは本来の役目を果たさず、行き場のない魔力は暴走し、脳神経を刺激する。

意識が緩やかに白く混濁していく——病みつきになる多幸福感が口許を緩ませる。

押し寄せてくる感覚にシヨージの足はふらついたが、意志の力で引き締めた。

今日はまだ、しみつたれた仕事がある。

やつてられないが、明日の飯にありつくためにも、ラリッてるわけにもいかない。

ジャケットのポケットから地図を取り出して広げた。頭の中にある目的地への道筋を焼き直すためだ。だが、地下ギルドの受付嬢が描いた地図は改めて見ても、クソみたいに雑だった。

意味もない花丸マークがあるのが更に怒りを呼び起こした。

落書きをする余裕があるくせに、適当に矢印だけで道が示されている。

頭にきながらシヨージはさまよい、路地を歩き回ると、集合住宅に挟まれた一軒家に出くわした。

ぼつんとして、まるで地上げ屋を拒絶して孤立したような佇まいをしている。

「ここか……」

赤煉瓦の屋根には『パーシベルのアトリエ』と書かれた木製看板。玄関口に飾られた小さな鈴がそよ風に吹かれ、寂しげにこすれ合っていた。

店舗は全体的に古びていて、ボロくなった箇所が目立つ。

花壇に植えられた花すらも頭<sup>こぶ</sup>を垂れて元気がない。

窓ガラスは曇り戸で店内の様子はわからなかったが、扉越しに男の声が聞こえてきた。

「だからよ、うちで働けばいいの。清潔だし、安全だし、高級店だ」

「すべて我々に任せればよろしい。業者を手配しましょう」

「でも、その、最後に自分で店をお掃除したいですし……どんな仕事かわからないのも困ります」

説得するような声が二つ——どちらも男のもの。

困惑する少女の声は一步引いた遠慮がちなものだった。

拒否を示そうとしているが、しつこい勧誘にまいつているのが口調からわかる。

ショージは地図をちらつと確認した。住所は間違いない。

玄関扉に歩み寄ってドアノブをひねると、きいと軋んだ音が響いた。

年月を経た金属雑貨の錆びた臭い、それに香木や薬品の残り香が鼻につんとくる。

正面カウンターには、大きささまざまなポーション瓶を飾っているガラスケースの陳列棚。

壁際には段差状の棚に置かれたアンティークの魔導具。干した薬草や毒消し草。健康食品の瓶詰

めや美容関連の軟膏<sup>クリーム</sup>。生葉の材料だろう、奇怪な形をした植物の鉢植えまである。

内装の壁紙は黄ばんで褪<sup>たい</sup>色<sup>しよく</sup>し、天井と壁の繋ぎ目には亀裂の線ができてしまっている。昔ながらの錬金屋といった風情だが、額縁に入った錬金術師の登録証書だけは新品だ。

「なんだ。客か？」

「悪いが兄さん。あとにしてくれ」

男が二人、ショージの出現に反応した。

わずらわしそうに振り返り、邪魔者への警戒心を示している。

二人とも、人ならざる獣人だった。

猪の面貌をした者を見るからに粗野そうだが、もう片方は落ちついた物腰の狼男だ。

どちらも野卑な獣人であることを差し引いても、慈悲から無縁の顔つきをしている。

彼らは常に他者にそうしているように相手が怯え、逃げるのを待った。

だがプレッシャーを与えられても、ショージは涼しい顔で黙ったまま立ち去らなかった。

それどころか、わざと片手を自分の腹部まで持ち上げて、何かを握り潰すような仕草で指関節を  
ごきりと鳴らす。

喧嘩を売る合図だ。空気が緊迫し、徐々に重苦しくなっていく。

獣人たちを威圧しながらも、ショージはちらつと二人の隙間の先にいる少女を見やった。

壁を背にし、縮こまっている彼女は思いがけない訪問者に助けを求めているようでもある。

「あわわわっ……」

白を基調とした清楚なワンピース姿。袖口が広がったゆつたりとした釣鐘型のスリーブ。ささやかな胸もととは可愛らしくリボン結びで留め、胴衣に巻かれた分厚い飾り布は下方へと垂れている。

スカートの上には紋様式が刺繍され、錬金術への傾倒ぶりを窺わせた。特に引き込まれるような青い光を放つ碧眼<sup>へきがん</sup>は魅力的だ。

肩口まで伸びているさらさらの金髪は色褪せもせず、黄金の糸のように艶やかでもある。

ただ少し若いか、あどけない顔つきはまだ美女ではなく美少女といった感じか。

「おい」

上着のポケットに両手を突っ込んでいる猪の獣人は、いら立たしさを隠そうともせず、唾液にまみれた牙をカチカチと鳴らし、鼻息を荒くしてショージとの距離をつめた。

威圧するためか、下からすくい上げるように睨みを利かせてくる。

「いいか、さつさと——」

「臭えから俺に近寄るなよ」

払いのける横拳が飛んだ。獣人の毛深い頬肉がぐにやりとえぐれる。

男の片足は浮き、ごきりと首骨が碎ける残忍な音がした。

太首をぐるりと半回転させたまま、倒れゆく獣人はふらっと、一本足の丸テーブルにぶつかった。

テーブルの上に飾られていた水晶製の土産物<sup>みやげもの</sup>に悲劇が巻き起こる。

ガラガラと音を立てて地面に散乱し、無残にも床と衝突して壊れていく。

店主である少女からすれば、たまったものではない。

両頬を押さえて悲しげに絶叫した。

「あああああつ！　しょ、商品があつ！」

「兄さん、俺らがどこのもんか知っててやってるのか？」

残ったならず者は中折れ帽のつばを摘まみ、挑むように目を光らせた。

パリッと糊のりの利いたビジネススーツ姿の狼男は暴力を前にしても、動揺していない。

首の骨を折って倒れた獣人よりも格上か。

伏した部下を一瞥したが、介抱しようとはしない。

無表情を保ったままのショージは、ゆっくりと口を開いた。

「その女とこの店は俺が売り飛ばす予定だ。てめえらに渡すわけにはいかないな」

「えっ、えっ……えええええっ?!　うっ、売り飛ばす?!　わわわわわたい、売り飛ばされちゃうんですかっ?!」

少女の悲鳴は天地が逆さまになったかのごとく、仰天したものだつた。

だが、狼男もショージも少女を一顧だにしなかった。

共通した決定事項のように扱われている。

睨み合いの駆け引きは——数秒ほどで、あっけなく終わった。

狼男はふっと脱力して、肩をすくめた。わかりやすく態度を和らげる。

琥珀色の瞳に優しい色を混ぜ、相手の緊張をほぐそうとしている。見えすいた芝居にショージは笑いそうになったが、考えてみれば何も面白くはなかった。



「お前も借金取りなのか？ 同業ならわかるだろ。俺たちが先に来た。だから俺たちが先に用を済ます。それがルールだろ？」

「お前らが来なかったことになればいいさ」

「おいつ、おいつ、兄弟よ。争ったつて金にはならないぜ。俺はワッツ・ブラザーズつて獣人組織の債権回収機構に属してる者だ。国に認可された金融免許だつてある。兄さんは？」

慣れた動作ですつと名刺を懐ふとこから差し出された。

頑かたくな態度を維持したままのシヨージは受け取らず、放置した。狼男の顔に赤みが差す。毛むくじやらの狼の面構えなのに、顔色が赤くなるのがわかる。

「俺は地下ギルドから委託を受けてる」

シヨージが所属している組織の名前を出すと、狼男は呆気を取られたような顔し、怒りを霧散させた。

地下ギルドとは別名、犯罪者ギルド。

闇の組織には違いないが、やや毛色が違う。

非合法的な仕事はクエストボードに貼りつけてあるだけのギルドであり、対外的には構成員になんの力も与えはしない。

システムは冒険者ギルドと相違ない。地下ギルドは構成員に仕事を斡旋するが、全面協力もしない。依頼人との間の仲介料を稼ぐだけだからだ。

つまり、シヨージは正規の借金取りというわけでもなく——怪しい輩やからの依頼クエストを拾ってきただけの

無頼漢ということになる。

「なら、俺ともめるのは賢明な選択とは言えないぜ。どうせ暇つぶしの小遣い稼ぎだろ？ そんなに熱くなつてどうするんだよ」

「俺は別に熱くなつてない」

「兄さんよ、よく、考えてみるよ。こっちは後ろ盾がある。正規の証文と抵当権も持つてる。そっちは一人だろ？ お前にお友達がいるとしても、十人もいないだろう」

「あと、三秒待つてやる。ここで死ぬかどうか決めればいい」

「わからねえのか。こっちは真面目にやつてるんだよ。てめえみたいな雑魚ざこはあとで来いつて言つてるんだよ！」

「お前があと来い」

「くたばつちまえっ！」

散々プライドが踏みにじられても、隙を窺っていたらしい狼男は声を張りあげて仕掛けてきた。手の平をかざしてショージの目許を覆い、視界をふさぎにかかると。そして、もう片方の手でベルトに吊り下げている短剣を引き抜く。

獣人は得てして純粹な人間よりも運動機能が優れている。反射速度や筋力は人並み以上だ。

しかもショージは近づきすぎて、充分な間合いに入っている。

手首が返され、まっすぐに銀色の軌跡が走り、がら空きの腹に刃が刺さる。

——寸前。

「あ？」

シヨージはそれを予期していたかのようにかわした。あっさりと狼男の伸びている右腕をひねりあげる。短剣がぼろっと落下した。そのまま腕の関節を反対の方向へと曲げていく。獣の口から苦痛のうめき声が漏れた。

しくじったことがよっぽど信じられなかったのか、狼男は唾然としている。

腕力なら勝てる——そうとでも、考えたのか。

足を踏ん張って主導権を取り戻そうとしたが、それはかえってよくなかった。拮抗もせずに力負けし、ボキッと関節の継ぎ目が碎け、腕が変形した。

「うぐあああああああ！」

突き出た狼の口先が跳ねる。脂汗をかきながらも折れた腕を必死に振り、逃げようとした獣人はまたまたとした足取りで前に歩いていく。

すかさずシヨージは床に落ちた短剣を膝を曲げて拾い、隙だらけの背中に突き刺した。

凶刃はスーツの布地を突き破り、ぶすりと皮膚の奥深くへとめり込んだ。刺された男の背筋は反り返った。シヨージは背肉をえぐるように刃先を回転させた。

「……ああ」

消え入るような断末魔の叫びが店内に響いた。

シヨージは短剣を引き抜き、血と脂にまみれた刃身を眺めたあと、未練もなく床へ捨てた。

短剣は弾み、からんと乾いた音を鳴らす。

「じゃあな、兄弟」

充血した眼球で最期にショージを睨み、狼男は糸が切れた人形のように床へと崩れ落ちた。ちようど、死体が二つ重なってできあがる。

荒事を終えたショージはそこで初めて、少女に向き直った。

唇についた赤い水滴。生暖かい返り血をべろりと舐め取る。

微笑みかけようとでもしたのか、凶悪な顔の口角がゆがんだ。

「さて、お前がパーシベルか？」

「は、はい、そうですね……ひいつ、お助けえ……ああ、お、お婆様あ……」

少女——パーシベルは血生臭い暴力への恐怖でガタガタと膝を震わせていたが、心の衝撃が下半身の緊張を緩ませてしまったようで、はしたなく下着をじわりと濡らしてしまい。

太ももからニーソックスまで小水をたらたらと流していき。

ほかほかの湯気が立つ尿液の流れは意志の力を以ってしても収まることはなく、ちろちろと排尿音を奏でながら足もとに大きな水溜まりを作り。

そのまま失禁した状態で、がくと首を折って気を失った。



## 第一章 パーフェクト・ポーシヨン

錬金術師の工房には巨大な大釜があるものだ。

ポーシヨンなどの薬品類の大量生産のためだ。ピザ屋にピザ窯があるのと同様に存在する。

鼻歌を交えながらシヨージは足場台の上に乗し、泡立つ大釜を前にして攪拌棒かくはんぼうをぐるぐると回していた。

殺害した獣人たちの死体をコトコトと煮込んでいるところで、油脂を浮かせる遺骸が水面にぶかぶかと浮いている絵面はぞつとする光景ではある。

「んっ、んんう……」

一方、工房は土間であるため、赤茶色の土床に捨て置かれ、気絶していたパーシベルは意識を取り戻そうとしていた。

片手を痛む頭部にやりつつ、唸りながらも上半身を起こす。

股間から伝わってくる不快感にびくつと気付き、恐る恐るスカートの中に手を入れた。聖水で浸かった生乾きのパンティ。ぐつちよりとしたべたつきが指を濡らした。何気なく臭いを嗅ぎ、うげえと嫌な顔をし、深々と嘆息する。

「起きたか」

「ふわっ!? なっ、何をしてらっしゃるのですか!」

声をかけられ、びっくりと肩を震わせてようやくショージの存在に気付いた。

赤面しながらも、怒声をあげたパーシベルは羞恥心を誤魔化そうとしているのか。

うーつと睨み、一連の痲態を目撃されたかと疑ってかかったのだが、作業中のショージは振り向きもせず淡々と答えた。

「死体を溶かし、下水道に流して殺人の証拠を隠滅してる」

「あつ……そつ、そうですか……そ、そういうの、気にされるんですね？ 後先のことを考えず、衝動的に殺つたように見えましたけど……」

「できそうだったんで一応はな。この材料を使わせてもらつてるぞ」  
ショージの足もとには薬瓶が乱雑に転がっていた。

品目を一見し、パーシベルは指を立てる。

「あつ、でつ、でもですね……お兄さんが入れた腐銀落酸ダウンスミスリルは確かに人骨をも溶かす作用がありますけど……石釜の底も抜けちゃうんです。その、そのままだと完全に溶ける前に大釜が使えなくなりますよ」

ぴたりとショージは手をとめた。

生半可な知識での死体処理だったが、失敗は困りものだ。

「別の薬品で中和と分解ができますから……それでご勘弁してくれませんか？」

「死体の処理ができるのか？」

「溶かすくらいなら……できます」

立ちあがったパーシベルは物置棚から一リットルサイズの丸底フラスコを手に取り、蒸留水タンクのレバーをひねり、流水をガラス面の目盛りにはびつたりと合わせる。

スタンドにフラスコを固定し、底部をアルコールランプのトロ火であぶった。テーブルの下にある薬品棚の取っ手を引き、瓶詰めの粉末や植物の根といった材料袋を取り出し、計量器に載せた。

測り終わると、今度はすり鉢でゴリゴリと材料を細かくする。

各種粉末と混ぜ合わせ、できた素材をフラスコの瓶口に投入する。

一連の作業は手早く判断に迷いが無い。

シヨージは腕組みしながら感心し、パーシベルを見直した。

小娘だが、売り子だけをしていたというわけではないのだ。

スターの形をした錠剤がフラスコにちゃぽんと入ると、瓶口からぶわつと煙が舞った。

怪しげな紫色の蒸気をパーシベルは顔をしかめて避けた。

薬液の出来具合を観察し、うん、とうなずく。

おどおどしながらシヨージに近づき、遠慮がちにフラスコを手渡してくる。

シヨージは半信半疑でガラスを透かすように見たあと、受け取って大釜へどぼどぼと投入した。

瞬間——水面に浮上していた水泡の数が激しく増加した。沸騰ではない。何かしらの反応だ。

火花が散ってスパークしたので、シヨージは後方へジャンプした。数分でバブルは収まり、びびりながら水面を覗き込むと、大釜の中身は白黒のマーブル模様へと変わっていた。

「ミルクコーヒーみたいだな」



「あつ、飲んだら死にますから駄目ですよ」

軽い注意が飛んでくる。

ジョークは伝わりにくいのが、ぶかぶかと浮かんでいた人骨は綺麗さっぱりと消失している。

さすが、餅は餅屋か。

「助かったぜ」

「えつ、あわつ、わ……ええつと……こちらこそです」

素直な謝礼の言葉にびっくりしたパーシベルは後頭部に手をやり、えへつと照れた。

だが——すぐにハツとした。自分が売りさばかれることを思い出したのだろう。

怖いですが、とても言いたげに涙目になつて身を縮こませる。

シヨージは怯えるパーシベルの横を通り抜け、廊下の縁側に腰を据えて一休みした。

もったいつけられ、突つ立つたままのパーシベルは所在なく、あちこちに視線を移している。

なぜ逃げないのか、という疑問をシヨージはぶつけようと思つたが、やめにした。

考へてることの予想はつく。目の前にいる恐ろしいギャング風の男からは逃げられないと決めつ

けているか、あるいは未だに借金をどうにか返却しようとしているお人よしだ。

シヨージとしては全財産を奪つてしまう予定だつたが——びくついている少女は不憫ではある。

「ワッツ・ブラザーズはこの薄汚れた街——エラーナイフに巣くつた獣人どもの組織だ。あんな汚

らしいシャワーの概念も知らなそうな連中から、よく金を借りる気になつたな」

「は、はい……まあ、いろいろなところから借りてたら、知らぬ間に雪だるま式に……」

「まあ、俺も地下ギルドの依頼通り、二十万イードルほど返してもらわなきゃならない」

二十万イードルはおよそ成人男性が一ヵ月働けば手に入る額だった。

たいしたことはない。はした金だ。そんな金額で二人の男をためらいなく葬ったショージにパーシベルは余計に恐怖感を覚えたのか、歯の根をがちがちと鳴らした。

「二十万くらい返せるだろ？ それで俺は許してやるよ」

「そのつ……わつ、私……五百万イードルくらい借金があるんです……現金はとでも……」

「手持ちはいくらくらいあるんだ？」

「三百イードルくらいで……子供のお小遣いよりもありません……店にある市販品のポーシオンや魔導具の中でも、お金になるものはとうに売っちゃいまして……正直、明日には家なき子になるかなあ、と思ったりもします」

「お前、職も家も同時になくなりそうなのか、マジで爆笑もんだな」

「うう……無情な現実です」

意気消沈してパーシベルは両肩を落とす、どんよりとした暗雲を背負う。

ショージは軽快にぱしつと膝を叩いた。

「事情はわかったぜ。俺は獣人どもほど鬼畜ってわけじゃない。淫売宿で働けなんて非人間的なこととは言わねえよ」

「じゃ、じゃあ……身体を売るのはなしでいいんですか？」

両手を合わせ、ゴマをするように無理やり笑顔を作り、パーシベルは可愛らしく上体を斜めに傾

けた。女の子が媚を売るときは所作である。

シヨージも明るい顔で口許をほころばせた。

「俺も最近知ったんだが、世の中には生命保険つてもんがあつてな。効率的で便利な商品なんだ。なんでかわからないが、偶然のふりをして馬車に踏み潰されれば大金がもらえる」

「身体を売るよりもずつとひどいですうううううう！」

書類にサインするだけでいいんだ、とシヨージは折りたたまれたしわくちやの紙をポケットから取り出したが、首をぶんぶんと振って拒否される。

娼婦になるか——死ぬかである場合。

よほどの純潔主義者でない限りは前者の方がよい。

「だったら別の方向で考えよう。変態野郎のケツ穴を舐めるだけで大金を稼げる簡単な仕事がある。まあ、俺はやったことはないが多分、便器を舐めるようなものだろ。何回か心を無にして頑張ればすぐに終わるさ」

「は、はわっ……ぜんっぜん、簡単じゃないんですっ！ てゆーか人間扱いされてないですっ！」  
ストレスのあまり過呼吸を起こしかけたパーシベルは興奮しながら叫んだ。

ふくれっ面で腕組みし、不満げにそっぽを向く。

相手から妥協を引き出して、甘えるようなわがままな態度だ。

少女が図に乗ったことを理解し、シヨージは抑揚のない声で警告した。

「俺のビジネスを邪魔した奴が今どうなってるか思い出した方がいいぞ。大釜のミルクコーヒーの

かさが増えても、俺は構わないんだ」

「はうつ！ お、お店のもので……十万くらいなら、多分、まだいけるかなあ、と……」

「通信石スビットロックを貸せ。近場の買い取り屋と話をしたい——念のため聞くが、紐付きはあるか？」

「ええつと……どつ、どうぞ……紐付きって値札のことですか？」

紐付きとは盗品のことを指す隠語だった。

意味を理解できないということは、ない。

世界に巡回している魔石の一種類である——通信石をパールシベルは懐から取り出し、両手でおさおすと手渡してくる。

シヨージは受け取った通信石の断面を撫で、外界に広がる力場と繋げる。

そのまま指でタップすると、人が生まれ持つ微細な魔力に反応して多様な色が明滅する。

配色を操作して固有信号を選び出し、望みの相手と連絡を取ることができる。

難点があるとすれば距離が離れすぎたり、魔力線が乱れると繋がらないことか。

「もしもし。よお、俺だ。クイックだ。ああ、相棒。そうだよ。いや、大したことじゃねえんだ。そうだ。債権整理だ。いや、そういうのはしてない。そんな誰かを殺したとか、血生臭い話じゃねえんだよ。はは、馬鹿を言うな。俺はいつだってクリーンな仕事しかしない。どんなことだって信用が第一だからな。争いごとが起きたら、まずは話し合いで解決するのが信条なんだよ。平和と愛の力を信じてるからな。知ってるだろ。番地は……」

パールシベルは空々しい会話に半眼になっていたが、シヨージが通信を切ったところで申し出た。

「あの、工房をお片付けさせてくれませんか？」

「人夫が来るさ。何もしなくていい。この際、何もかも売り払っちゃまえよ。それで逃げちまえ。俺は俺の取り分さえ得られればそれでいい」

金目の物を見繕うため、パーシベルの工房をショージはざつくりと観察した。

ガラス製の実験用具は磨かれているが、フラスコや試験管にはひび割れを補強した痕跡があるし、天秤測りの金具は錆びついている。勝手口に近い、一番需要のあるポーシヨンの材料袋が置かれていただろう地べたは空となり、黒ずんで変色した何も無い土があるだけだ。

ここ最近——まともに錬成すらしていないのだろう。

人目につく店先だけ小奇麗にしておいて、内情は火の車なのがわかってしまう。

「お前はもう錬金術師としては、終わっちゃまってるようだな」

痛烈な一言にパーシベルはショックを受けたのか、しゅんとしてうなだれた。

「わかってます……でも、ここはお婆様のお店ですし……こうなっちゃったのは私の腕が悪  
いからでもあります。誰かに売り渡されるにしろ、きちんとしておきたいんです」

動かすには無理なのか。

パーシベルは土間をホウキで掃除しながら、自分の過去を語りだした。それは心の整理をするためでもあったのだろう。

元々、この店は先代錬金術師である祖母のものであり。

店の手伝いをするうちに錬金術に興味を持ち、跡取りとなった。

亡き祖母は特許パテントを保持するに至るほど、熟達した錬金術師ではあった。

ポーシヨンは言うまでもなく神祕の霊薬。

その製法や種類もまた多岐に渡る。

新たな霊薬を発明して錬金術師協会に認可され、役立つ調合法を世に広めれば諸権利を保有できるが、錬金術師の中でも特に限られた者だけだ。

そういう意味では、パーシベルの祖母は幸運だった。

断裂した細かな神経を修復する特殊ポーシヨンは堅調な売れゆきをみせ、店を放漫経営にしても細々とやっていけるだけの収入を得ていた。

そんな特許の期限が切れれば、収入源も切れる。

そもそも、人気がない繁華街の外れで商売をするなど正気の沙汰ではなく。

先代の遺産で食べていた無名の錬金術師など、うさん臭い輩に過ぎない。

「近頃は錬金屋もチェイン化が進んでまして、皆、うちみたいな古臭いところじゃなくて、オープンで入りやすく、ハキハキした店員さんが熱心に接客するところに行っちゃうんです」

「当然だ」

廊下の縁側に腰掛けたまま足を組んでいたシヨージは同意した。

二代目が経営に失敗し、落ちぶれるのもよくある話だ。

追いつけかけられたパーシベルは両指でこぼれる涙をぬぐった。

「うわーんっ！　うちは質だけは自信があつたのにな！」

「材料とレシピさえあれば誰が作っても一緒だろうが。泣き言ほざく暇があるのなら、半裸で接客でもやりやあよかったんだよ」

「それでなんとかなるなら、とつくにやつてますうー！」

「無駄にやる気はあるんだなお前」

ショージは腰を上げ、工房の隅にあった冷蔵庫に近寄って扉を開いた。

主張するように質に自信があるのなら、残った製品を味見してみたくなったのだ。

庫内の壁面に設置された冷却石アイスブロックから、冷気がふわっと空中に霧散して頬を撫でる。

ショージはすつと目を細めた。商品の保存状態は良好だ。その証拠にどのボトルも光沢がある。

保存方法がわかってない錬金屋は色をくすませる。

経営の才はなくても、腕が錆びているわけではない。

完成品は冷蔵保存するのが常識だ。ポーシオンは生葉ゆえに鮮度が命なのだ。

常温でも保存できるが、やはり年月と共に劣化する。

内部液は不純物をふくんでおらず、混合でしくじって沈殿しているものもない。

ポーシオンの色彩や種類に目を通す。

白色の肉体の損傷を癒す回復系。

青色の魔力を補給する霊気系。

緑色の感覚器官や筋力を向上させる強化系。

黄色の物事の性質を変える変質系。

赤色の敵を倒すための攻撃系。

ポーシオンとは、大別すればその五種に分類される。

彩り豊かな庫内でもっともシヨージの目を引いたのは、新雪のように美しい液体だった。実験途中なのか、目盛りのしるされた丸底フラスコに入っているが、段違いの光度がある。

丸い瓶の容器を傾けると、ガラスの内壁に軌跡が残った。ねっとりとした濃厚さもある。

『パーフェクトポーシオン』

ラベルにはそう明示されている。

基調が白色の回復系であるのならローポーシオン、ミドルポーシオン、ハイポーシオンの三分類が基本だ。その他の回復系は一般販売されていない特殊ポーシオンに該当するが、ここまで聖なる白光を宿したものは見たことがない。

興味本位で手に取る。コルク栓を外した。

まず、一滴だけ指につけて舐めてみる。

ここまで、シヨージは油断していた。

どうせこけおどしで、大した作用がないと思い込んでいた。

少量の摂取はあくまで味見だ。

しかし——舌が燃えた。



破壊的な衝撃が脳天を突き抜けた。手先が震えている。瞳が自分の意志に反してぶれる。生命の炎に身を包まれたような錯覚にとらわれる。

ぐらつと視界が揺れた。歓喜で立っていられない。ハイになりすぎて空も飛べそうだ。

「うお……おとおおおおおお、き、き、キクじゃねえかつ！」

心臓が早鐘を打って騒がしい。動脈が激しく脈動し、神経が鋭敏になっている。

どこからか生まれた大量のエネルギーが体内を循環するのがわかる。

歯の隙間から吐かれた息に熱気がこもる。

意味もなく土間を歩き回りながら成分を分析しようとしたが、無駄だった。奥深い霊薬の味だ。

一種類さえ看破できない。

しまいには衝動を抑えきれず、空を仰いだ。

「いいぞコレ。すげえ！ ああ、くそっ！ なんてこった！ こんなに最高のブツに出会ったのは初めてだつ！ いいぜこれ！ 作った奴は完全なファック野郎だつ！ 俺よりもはるかにイカレてる……ッ！ こんなに超高純度の回復系ポーションは飲んだことはねえ！」

「あつ、あつ、ど、どうもですう……そ、それ私が作ったんですけど……」

若干——パーシベルは引き気味だったが、構わずにシヨージは狂喜しながらパーフェクトポーションを凝視した。

理解すれば、魅惑的なほど美しい色だとわかる。

高純度の回復系ポーションとして、完璧に純白なのだ。

この穢れない清らかな霊薬は、天空の女神が常飲していてもおかしくない。

「おおおお！ いいなつ、素晴らしいぞ……おいつ！」

きよどつているパーシベルの前にショージは立った。

小さな両肩にバシツとごつい両手が置かれる。

興奮した熱い吐息がパーシベルのほっぺを通り抜けていく。ショージのぎらぎらとした目は有無を言わせぬ凄味がある。少女は身をすくませて、たじろいだ。

「なんでこれ売らなかつたんだっ！ 量産しろよ！ 絶対に金になるぞ！」

「い、いやあ、そのお、お、お恥ずかしい話なのですがあ……ちよつと、回復系ポーシオンとしては度を越すほど強力で……錬金術師協会から認可が下りなくてえ……」

「どいつを殺せばいい？ 名前を言え。俺がぶつ殺してきてやる」

「す、すいません……協会というよりもお……ぶつちゃけ素材も……違法なものばかりです。あははっ、錬金術って追究しすぎたらやばいことになるんですね……借金の理由のひとつでもあるというか……そういうことしちゃいまして、はい」

「法律か。俺の一番嫌いな単語だ。吐き気がする。いや、待てよ……裏を通せばいいか。そうだ。かえってその方がいい。頭が冴えてきやがったぞ。こいつは商売にできるな」

パーシベルから手を離して、ショージは顎を撫でながら思案した。  
強力な違法ポーシオンだ。確かな効き目があるのにもつたいない。

この味。この効能。この純度は奇跡の産物だ。

街をさまようポーシオン中毒者たちが目の色を変え、欲しがることは疑いない。

落ちつくために、シヨージは戸棚にあったポーシオンの原料である葉草袋に手を突っ込んだ。

ぱりぱりと噛みちぎり、心が安静になるように念じた。別の魔力の宿った葉っぱを食うことで、パーフェクトポーシオンの純度を薄れさせる。

「あ、お客様」

りんりーん、と玄関扉の呼び出し鈴が鳴った。

素直に出迎えないこうとするパーシベルを手で制し、シヨージは廊下を歩いて玄関に向かった。扉を開けると、見知っている壮年の商人と付き従う五人の部下。

背後には幌付きの荷馬車の姿がある。

シヨージが先ほど呼び寄せた買い取り屋のボーデイとその一味だった。

「よお、相棒。商品を引き取りに来たぜ。少しは金目のものはあるんだろうな？」

ボーデイは商売柄、親しみある愛想笑いを見せた。

——にもかかわらず、上背のあるシヨージは冷徹に見下ろした。

「なんの話だ？」

「いや、お前が呼び出したんだろうが。立ち話をしてもしようがねえし、中に入れてくれや」

「知らねえな。帰ってくれよ」

しらばつくれることにしたシヨージは素知らぬ顔で追い払おうとした。

パーフェクトポーシオンが持つていかれば、せつかく芽生えそうな商売の種が消えてしまう。

無論、納得のいかないボーディは笑顔を打ち消して激昂した。

「はあ？ ふざけんよ！ 俺は仕事があるっていうから、わざわざ人手を手配して来たんだぞ。手ぶらで帰れるかよ」

「うつつせえんだよ！ ぶつ殺されてえのか！ ああっ!! 全員ここで死にたいのか！」

恫喝すると同時にショージは鉄拳をボーディの鼻面に叩き込んだ。ポーシオンを飲んで興奮状態だったこともあり、演技ではなく少し本気で逆切れした。

ボーディの前歯は砕け散り、めきやりと鼻骨が折れて陥没する。

よだれと鼻血が地面に飛散し、大の字に倒れた。

ボーディは一発目で既に白目を剥いて気を失っていたが、ショージは脇腹を遠慮なく蹴り飛ばしていちいち追撃を仕掛け、男の背中を宙に浮かせていた。

「どうして、そんなに俺をいら立たせるんだ!? 俺は帰れって言ったよな！ どうして言うことを聞かねえんだ！ まったく意味がわかんねえだろうがあっ！」

「お、おい、やめろ！」

「ひどい奴めっ！ ひどい奴めっ！ お前なんか相棒じゃねえ！」

トドメとばかりにボーディの顔面を靴底で踏みつける。

あまりと言えばあまりの惨状に、運搬人が実力行使に出ようとした。

横からの気配を察したショージは振り向き、ぎらついた眼で憎々しげに男たちを睨む。

「うるせえ死ねやっ！」

手を伸ばしかけた運搬人には筋肉の鎧があつたが、その硬い腹部にショージは竜巻みたいな胴回し蹴りをぶち当てた。

運搬人は足先を浮かせ、勢いよく中空へぶつ飛ばされ——戸口で、はらはらしているパーシベルの横の土壁に激突した。やられた男は頭から流血し、黄色の土煙にまみれてパーシベルの方に震える手を伸ばして助けを求めたが、がくつと頭を落として沈んだ。

当たり前だが、他の四人は突然の暴拳にうろたえていた。

尋常ならざる手合いと対峙しているとわかり、及び腰になりながら遠ざかる。

圧倒的な暴力だ。阿修羅ごとき形相は悪鬼のようでもある。

何よりも——なぜ怒っているのか、意味がわからない。

呼ばれたから来ただけなのに。

「さつさと転がったゴミを拾って失せろや！ いいか！ 二度と俺を気安く相棒なんて呼ぶんじやねえ！ ぶつ殺されたくなかつたらなっ！」

怒号に怯え、四人の運搬人は顔を青くしながら背を向けて退散した。

ショージはその背を睨みつけていたが、完全に立ち去つたのを確認して店内に戻ろうとすると、戸口でぶくぶくと泡を吐いて気絶しているパーシベルを発見した。

か弱い心を持つ彼女はまたもや股間を濡らして失禁していたが、ショージは氣に留めることもなく片手で襟首えりくびをつかみ、ずるずると浴室へと運ぶのだった。

窮屈な浴室には円盤型の固定シャワーだけしかなかった。

風呂釜はなく、貯水タンクから流された水が熱源石フアイアロックで温められ、真上からお湯を浴びる仕組みとなっている。

シヨージは気絶しているパーシベルをどうしたものかと考えた末、衣服を剥ぎ取って湯あみをさせることにした。話はまだ終わっていないかったし、小便の臭いをまき散らしている娘と対話するのも気が進まなかったからだ。

パーシベルは雑にタイル床に投げ捨てられ、ゴンツと頭部に衝撃を受けて目覚めた。痛みでばちと目をしばたかせたあと、むくりと上半身を起こす。

しゃあああと放音音が出て、頭上からぼたぼたと温かいお湯が落ちてきているのに驚き、ぐらぐらと頭を揺すっている。

固まった髪房がべったりと顔にくっついていているのが邪魔つ気なのか、指先で横にずらした。

ぼんやり眼でパーシベルは現実世界に戻ってきたが、そこにあるのは悪夢だ。

両膝に手をつけ、腰を折り曲げてパーシベルの顔を覗き込んでいるシヨージの姿がある。

鼻先が触れそうなほど近い。眼球は水で濡れても微動だにしていない。

うっ、と息を呑んでパーシベルは後退した。

目を白黒させて状況を把握しようとしているが、声を失っている。

やがて、自分のあらゆる姿に気付くと、青白い唇を動かした。

「あうう、あ、あのおう……ど、どっ、どうして、私は全裸にされてるんですか？」

股をびったりと閉じ、両手で胸もとを隠しながらパーシベルはショージを見上げた。

貞操の危機を感じ取って後ずさるものの、浴室は狭くあえなく壁にぶつかってしまふ。

ショージはゆらりと背筋を伸ばし、シャワーのコックをひねって放水をとめた。

「俺は考えた。俺たちは手を組むべきだ」

「はっ、はぁ？」

問題は裸にされていることだったのだろうが——出てきたのは別の話題だ。

「お前のパーシオンは掛け値なしに最高だ。宮廷錬金術師が緊急処置用に造ったブーツよりも強力だ。

それは商品として超一流の品質を意味している」

「あ、ありがとうございます。れっ、錬金術師としては冥利に尽きますが……」

「念のため聞くが……本当にお前が作ったのか？ 今なら嘘を言っていた場合、許してやる。もし

もあとで俺に嘘をついたとわかった場合、お前は新聞記事の一面を飾ることになる」

脅し文句に全裸のパーシベルは混乱し、どこかに逃げ場所を探すように視線をさまよわせたが、裸身ではやはり逃亡できない。

それに質問が己の誇りに関することだとわかると、唇をきゅつと引き結んだ。

パーシベルは強い意志をよみがえらせ、碧眼に力を込めた。

「わ、我々……錬金術師は……純化を志す者なのです……石を鉄に、鉄を銅に、銅を銀に、銀を金

へと変えていくのです。ゆえに——」

緊張しながらも小さな胸を震わせ、息をすうつと吸い込む。

「わ、私だけが到達した純然たる秘法は……」回復の純化を求めた私だけが造れるんです！」  
胆が据わった一声だ。捨て身の気構えがある。根底にある矜持を感じさせた。

シヨージは、にやりとして大きくうなずいた。

「いいだろう、ならば俺と取引だ」

「と、取引ですか？」

「俺がお前のパーフェクトポジションをさばく。お前は造れ。二人で儲けるんだ。一緒に大金を手に入れようぜ」

「たっ、大金ですか……で、でも、あのポジションは実験作で法律に認められてなくて……」

「法律がお前に何をしてくれた？ 飯を奢ってくれたことでもあるのか？ 善き市民として飢え死にするのと、悪人になってごちそうを食べるのとどっちがいいと思う？」

「それは……」

「天国を信じてるのか。それもいい。俺が去ったあと、お前に待っているのは路上の売春婦になる運命だ。二度とフラスコを握れず、そのうち致命的な性病をわずらって病床でこの世を恨みながら死ぬんだ。哀れなパーシベル。可哀相な子羊よ。どうか神様、死後に救いあれ！ だ」

天国——誰も見たことのない安らぎに満ちた世界。

誰も見たことがないのに、安息など本当にあるのだろうか。



もしも神様が救済してくれるなら死後ではなく、この場で助けるべきではないか。

パーシベルはうつむきながら、タイルに散った水滴を焦点の定まらない目で見つめている。少女の思考など、シヨージには簡単に見透かした。

エラーナイフは治安も悪く、戦後経済は回復しきっていない。

雇用水準は低く、薄っぺらな求人票をめくってもすぐに見終わってしまう。

オリジナルポジションを創るほど、腕前に自信のある錬金術師だ。

子羊の外見をしていても、内面は誇り高いに決まっている。

他の錬金術師の下働きをする、という発想さえないだろう。

「わっ、わわ……私が……その、造るだけでいいなら……やってもいいかな、と……」

「もちろんだ。造るだけでいいとも。よろしく頼むぞ相棒」

予想通りの方向に転んだ。迷う隙を与えずにシヨージが強引に握手を交わすと、パーシベルは力強く大きい手にほっとしていた。

胸に空いた手を当て、救われたという顔をしている。

次の仕事が決まったことを喜んでいいのか。

それとも奈落に落ちても錬金術ができればいい、と考えているのか。

どちらにせよ、シヨージにとっては嬉しいことだった。

「はっ、はっ……はい、よろしくお願います。ところで、お兄さんはどういう方なんですか？」

「そういえば自己紹介していなかったな。俺はシヨージ・クイックだ。非合法な仕事で飯を食って



るから、ギャングつてことになるか。元は王都で兵隊でな……まあ、街角ストリートレイパーの勇者でもある」

「えっと……冗談ですよね？」

プレイヤー 勇者という階位はやすやすと口にしていいものではない。概ね、人間を超えた人外魔境に棲む者として扱われている存在だ。確かに腕力は並ではなかったが、名を冠するに足る資質を目撃していない。パーシベルは信じきることができず、曖昧に笑った。

「というわけでひとまず、お前を抱いておく」

「はい、わかりま……って、はい!! な、な、ななんですかっ!!」

「身体を通じ合わせ、仲間にするためだ。というのが建前で」

「建前で？」

「お前を逃さないためだ」

にべもなく、無情な言葉だった。

※ ※

いざ——コトに及ぶこととなり。

ショージが緩慢に少女の肉体に手を伸ばすと、青い顔をしたパーシベルはアーモンド目をくわつと開いて顎を引く。

追いつめられた小動物が捕食動物を威嚇するような目つきでショージを見返している。

見ず知らずの男に抱かれることに拒否感のない少女などいない。

それにしても警戒心が高い。

反応からして生娘か。

なし崩しのモノにさえしてしまえば——従順にできそうなおとなしめの性格だが、万が一失敗して変に恨まれても困る。

これはどうしたものかと考えたが、ショージは先ほど補充したポジションを用いることにした。弾薬帯から試験管を取り出し、パーシベルの眼前でちゃぽちゃぽと振る。

中身はパーフェクトポジション。刺激で理性がぐらつけば貞操観念も薄れる。

快楽を素直に受け入れられるようにもなる。

回復効果により——苦痛の少ない破瓜もできる。

「試飲したことくらいあるだろ？ こいつで痛みはなくなる」

「動物実験が主体でして……前に自分で試飲したこともあるのですが、カレンダーから偽札を錬成しようとして頑張つてしまいました。無駄にテンションあがってくるんですよね……」

「成功したらよかったのにな」

「ええ、ほんとですよ」

意図を理解したパーシベルはふっと諦観の表情をよぎらせ、試験管を受け取った。

避けては通れないことだとわかり、観念したのか。

コルク栓を外し、口につけるとときに一瞬だけためらったが、目を閉じてぐいっと飲みくです。

すぐにポーシオン効果がパーシベルの体中に駆け巡った。ホタルの発光程度の輝きを伴い、白く柔らかい薄膜となって全身が神秘に包まれる。

体細胞を活性化させ、治癒させようとする効果が働く。

流体となった魔力は変異し、怪我を治し、体力を回復させようとする。

――が。

五体満足であれば、陶醉感だけが襲ってくる。

意識を天国へと招待し、心の痛みを打ち消し、感覚をクリアにしながらも酩酊めいていに似た状態へ誘い込んでいく。

パーシベルのもちもちの頬に朱が差した。白い柔肌が発汗して艶めかしくなる。

吐息が弾み、呼吸は色づき、興奮していく。

碧眼から放たれるブルーの光は正気を失って弱々しくなる。

ぐにやりと肉体が弛緩し、パーシベルの上半身は傾いた。

壁に肩をぶつけてもたれ、瞳はとろんとして艶美な女の色香のようなものが漂ってきた。

「ふわぁっ……ふうー……やっぱり、効きますね……」

「どんな気分だ？」

「最高ですよ……誰が造ってると思ってるんですか？」

「濡れるか？」

「それは気が早すぎですよ……うふふっ、でもお、お兄さんが私をいい子、いい子してくれたら、

濡れちゃうかも……あははっ、私、何を言ってるんだろ……」

ふわふわしているパーシベルの頭をなでなでしてみる。

童女をあやすような手つきでやったが、素直に嬉しそうに喉をくうんと鳴らす。

「あうっ……嬉しいです。ちょこつと……きゅんつときましたよ……」

「どれ」

パーシベルの膝頭を両手でつかむ。無遠慮にぐいっと両脚を開かせた。

少女が普段は秘密にしている大切な部分は濡れてはいない。

マジマジと恥部を見つめると恥毛がなかった。

珍しいことに、つるつとして可愛らしい花びらだ。

「やあん」

「まあ、順序よくやってやるよ」

シヨージは開いた股の間に入り込み、素早くパーシベルの唇を奪った。強引に口を開かせ、口腔にひそんだ桃色の小さな舌をから擽とめ捕るように舌先を回す。

そのまま細肩をつかんで押さえ込もうとしたが、いらなかった。

抵抗はない。幾分か硬さが取れている。筋肉は緊張してはいない。

薄く開いている碧眼を眺めてみるが、拒絶や嫌悪の色もない。

パーフェクトポーシオンは下手な媚薬よりも、よっぽど効能がある。

「んっ、ちゅうっ……ちゅうっ……あふうっ……初キス……ちゅっ」

触れた皮膚から体温が伝わってきた。パーシベルの人肌はじんわりとして温かい。背中に手を回して抱き寄せる。

力を込めすぎれば折れそうなほど、柔らかな肉体は華奢だ。

「ちゅー……って気持ちいいですね……うふっ」

股ぐらをだらしなく開いたまま、ご満悦でつぶやく。

男の前で自分の女性器が露わになっても、気にすることは無い。

ポーシオン効果で夢見心地。だらんと目尻を垂らし、羞恥心は高揚感で消失していた。

試しにお腕型の乳房に触れてみると、くすぐったそうに口許を緩める。

「あっ……ん……もう、なんか、変な感じします……あははっ……うんっ」

つるつるとした肌触りだ。指を跳ね返す弾力もちゃんとある。

柔らかい脂肪の上にある桃色の突起を摘まみ、こねくり回すとピンと立ってくる。首筋にキスし

て舐めつつ、鎖骨からゆつくりと胸もとに舌を這わせていく。

乳首を口にふくむと、パーシベルは熱っぽい吐息を漏らした。

「ああ……はふうっ……んんっ……えっちな感じですよ……ね……お胸、好きですよ？」

「小ぶりだが形もいいし、感度もよさそうだな」

「ははっ……おっぱいを吸われてると……なんか、胸がきゅんきゅんときちやつて。ふふっ、ちよ

っぴりいいかも……うふふっ……あんっ！」

自分の肉体の反応を楽しんでいるのか。パーシベルは何を思ったのか、胸を吸っているショージ

の頭を両手で抱えた。幼児のようにはしゃぎながら乱れた黒髪を摘まんだり、伸ばしたりしつつ、手先でおもちゃにしようとしている。

ただでさえ小娘なのに、ポーシヨンの影響で更に精神的に幼くなっているのか。怖いもの知らずな真似だ。

「あんっ！　だめですよ、もう……吸いすぎですよお……感じちゃいますから……」

非難を無視しながらシヨージは胸をより強く吸い、身震いしているパーシベルの内側の太ももに指を滑らせた。さらさらの肌の柔軟さが四指に伝わってくる。

大陰唇に手の平を添えると、熱い蜜液が滲<sup>に</sup>んでいた。感度は本当にいい。どこかしらを触ると、必ず反応が戻ってくるのも楽しい。

ふうっ、とパーシベルから甘い吐息が漏れた。

ひくついている秘部は可愛らしい。

花びらをかき分け、人差し指の第一関節を膣口に侵入させる。

そのまま円を描くように浅い部分でこねくり回す。太指が意外なほど丁寧に動く。

蒸れた膣肉から愛液がしぶきとなつて弾けた。ちゃぶちゃぶとした卑猥な音が鳴ってくる。摩擦を続けることで、色欲に溺れる女の體<sup>す</sup>えた匂いが空気にふんわりと混じってきた。

「ああ……んんっ。あはっ……いやあ……あんっ」

小粒な淫核をぐりぐりと親指でなぶる。いやいやと細身をよじるが本気で逃げようとはしない。パーシベルの下顎が何度も跳ねる。歯を噛み締め、官能的な愛撫をこらえている。



息をとめていたので、シヨージが動かすのをやめた。

休憩時間を与えられ、はぁーはぁーとパーシベルは深呼吸した。

上気した顔は悦楽に染まって桜色だ。

「気持ちいいです……お兄さん、お上手……自分でするより、ずっとイイです……あはっ……私、またお漏らしかな……」

愛液でびちゃびちゃになった股間を見下ろして空虚につぶやいた。気が抜けた緩い笑み。

タイルまで粘り気の淫液が漏れている。姦淫するには申し分ない愛液の量だ。

シヨージはジーンズとトランクスを一緒に下ろした。

そそり立つ陰茎が外気に触れる。

パーシベルは何か理解できない物体を見たように、不思議そうに頭を横に倒す。

正体に思い至ると、納得したのか手の平に拳をぼんつと落とす。

「あっ……そつかぁ。それが、おちんちんですよね……？ おつきいですね……私のお腹に入りますかね……？」

「試してみないとな」

「そうですね……そうですね。試してみないとわからないですよね……きゃっ！」

肩を押し、タイルの上に寝かせたパーシベルの両脚を持ち上げた。

股関節が少しだけ宙に浮かべられた形となり、小ぶりの尻の全容が丸見えた。菊門から肉裂までくつきりと露わになる。

位置が定まると次は腕が奪い、たたんだ足を持つように促された。

羞恥心を湧かせるM字体勢だ。

盛大に女性器をオーブンさせる形となったパーシベルは、期待感に満ちた顔をしている。

「私、処女喪失するんですね……うふふ……これで一人前の女になるんですね……」

「かもな」

ひくひくとした膣口は閉じたり開いたりして、物欲しげだ。

暗い小さな穴から発情した女の淫臭が強く香ってくる。脳髓が焦げつく甘酸っぱい匂いだ。

可愛げのある未使用の小陰唇に亀頭をびとりと当てると、おっ、と唸るほど熱かった。

見ればパーシベルの肉体からは水気が飛んでいる。

性欲の興奮が高まり、熱気となって汗が蒸発しているのだ。

パーシベルの熟した陰部は期待が持てる。少女の秘肉を味わう快感はたまらないだろう。

性欲に突き動かされた。竿を固定し、雌穴にカリ部分までつぶつと挿入させる。

異物を押し返そうとする感触があるが、よく濡れているおかげで滑っていく。

「ああああ……んっ！ は、はうう……お腹の中に……は、入って……きますうう！」

些細な抵抗は腰に少し力を入れれば、すぐに終わった。

半分ほど挿し込むと、今度は逆に膣壁に備えた細かな肉の突起がペニスを掬め捕ろうとする。

窮屈さを感じながらも一気に根元までもぐり込ませる。そこまでやると、ぬめり気のある膣内を

ようやく制覇した達成感を覚えた。

「はあん！ はあ……ううん、あああ……入ってる。凄いですう……あんなに大きいの……んっ、お兄さんの……かっちこっちですね……脈打ってて、これが、男の人なんですね……んっ」

膣内は熱い。煮え湯のようだ。硬棒を通して身体の内までパーシベルの体温が伝わる。

ジーンズをたぐり寄せて試験管の栓を抜いた。パーフェクトポーションをパーシベルの口先に運ぶと、追加を快く受け入れ、瓶口をはむつと啜える。

ごくごく喉が鳴る。唇から霊葉をこぼしつ、恍惚とした顔つきになっていく。必要な量以上に飲ませた。より乱れてほしかったからだ。

膣口からは純潔の証である鮮血が垂れているが、痛みはなさそうだ。

「あつ、あつ、んんっ！ はああ……うっ、ああ！ いいっ！ はあんっ！」

一物をしみ込ませるように、腰の動きを開始した。

身の丈に合わない男根を挿し込んだせいか、膣肉の圧迫感は痛いくらいだ。

少女らしく胴体は細く、小腹のくせにしつかりと怒張を呑み込んでいるのは驚きでもある。

「いやあああ、いいっ……はうっ……お兄さんのおっ……凄いい……何これえ……んっ！」

動く膣の高温が余計に感じられる。ねっとりとしながらもほてっている。

男を啜えたばかりの処女肉の締めつけは強いが、薬に腰を動かせるほどよく濡れていて、腰をぶつける度に股間の付け根にあふれた愛液がくっついてくる。

「ふわっ……いっ、いいです……ポーションえっちつて……いいですう……あううん！ お兄さんのおちんちん、こんなに……気持ちいいんですね……あつ、あつ、あつ……ひううう！」

嬌声をあげ、シヨージの狙い通り理性を失ったパーシベルは早くも肉欲に溺れ始めた。

奥深くに挿入する度により声が浴室を反響する。感じやすい少女だ。

シヨージとしても、必死に腰を振って前後運動している甲斐がある。

雌としての性器も極上品だ。こんなに熱い膣穴はそうない。

パーシベルの少女らしい面影は崩れ、女としての淫らかな顔つきになっている。

思いきつて子宮口の壁を亀頭でぐりつとねじると、パーシベルはひゅうつと息を吸い込み、大口を開く。

「ふあああああ……ひゃ、あつ、ああんっ！」

一突きしてからシヨージが動くのをとめるとパーシベルは両目を閉じ、んーつと感極まったように唸る。碧眼が目まぐるしく微動している。

快感を加えられたのに男がとまっているのがもどかしいのか、反応を探っていたシヨージにパーシベルは催促した。

「ふうっ！ あつ、あつ、あつ……お兄さあんっ、もつと……もつと、たつくさん、動いていいんですよう……こんな、こんな気持ちいいなら……たくさん、私のおま○こをすぼすぼして、いいですからあ……」

「わかったよ」

おねだりで愛しくなり、申し掛かってキスをする、お返しに舌がしっぴかり戻ってくる。

菌茎を擦り、舌先を絡め合うと、パーシベルはとろんとした淫靡な微笑を浮かべた。

唾液が交換されて混ざり、唇同士を離すと、つうと透明な糸が引く。

律動を継続しながらパーシベルをあえがせていると、段々と熱い性感が昇りつめてきた。

自身の硬質な腰を回して膣壁の奥を擦りながら、シヨージはパーシベルの耳もとでささやいた。

「お前の腹の中でぶちまけてやるよ」

「はっ、はふうっ……えっ、ええっ、なっ、中で出しちゃうんですかぁ……あんっ！　だっ、ただだっ、だめですう。そんなの、赤ちゃんできちやうからあ、困りますよう……！」

残酷な欲望がやってしまえ、と訴えかけている。

ぬくい膣を味わっていると、何もかも忘れてしまいそうだ。視界が狭まってくる。

抑制など、とうに捨てた。腰の動きが荒っぽくなる。

目の前のか弱く、可愛らしい女の下腹に自分の種をまいてやりたい。

「ひゃあああっ！　うあっ！　いいっ、だっ、だめですよー！　あんっ！　孕んじやうから、だめですってえーっ！」

絹糸のような金髪を振り乱し、玉汗を額に浮かべたパーシベルは悲鳴をあげている。

彼女は碧眼を涙でいっぱいにしてしながら虚空へ手を伸ばした。

細腕で男の胸を押しつけようとしているが、そうしながらも実際のパーシベルは真逆なことをしていた。いつの間にか、シヨージの腰部にはパーシベルのふくらはぎが密接に絡まっているし、カトまでもが当たっている。

ホールドするほど密着し、淫乱な少女は自分を貫く男を逃がさないようにしていた。



排尿しきると、下半身をびくびくと痺れさせながらも、脱力してぺたんと背中をタイルにつけた。パーシベルは息も絶え絶えだったが、うつとりとした顔をしていた。

細い足輪の拘束が解かれたので、ショージはペニスを引き抜いた。

パーシベルの恥部から白濁液がどぶりとこぼれ、アヌスに落ちていく。

「あつ……ああつ……んっ……お兄さん、中に出すなんて、ひどいですよ……でもまあ、気持ちよかったですけど……ポーション飲んでセックスって最高にいいですね……これはオナニーよりも病みつきになりそうです」

「それはよかったが、お前はオムツか何か穿いた方がいいな」

「あ、おしっこしちゃって……すいません……でも、お兄さんも私のお腹にたっぷりと中出しをキメましたし……お互い様ってやつですよね？」

やり返して、してやったり顔。

なんとなく拳を握り、パーシベルの頭を小突こうかと思ったが、ショージは自制した。

互いに相手の同意なく体液をかけ合った同士だ。これから先のパートナーでもある。

ひとまずは穏便にいこう。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**